

六月も心動かされるさまざまな詩と出会うことができました。
特に印象に残った作品を以下に。

雨蛙よう
お前は俺の大きさに
全然びびらねえんだな
降旗 沃（東京都）

私たち人間が私たちよりずいぶん大きな生命体に遭遇したら「びび」るどころでは済まないですよね。蛙のほうがよくど胆が据わっているのかも。その度胸に感心するかのような「雨蛙」への親しみのこもった口調が楽しい。

悲しみの着水の音 菊花店
まちりこ（埼玉県）

「悲しみ」は水紋のようにひろがってゆくのだろうか、それとも水のなかに解き放たれ溶けてゆくのだろうか。「悲しみ」を持つ主体ではなく「悲しみ」そのものが描かれることで詩が深まっていて、奥行きを持つ「菊花店」の空間に引き寄せられます。

心臓よりも足音に生かされる
ヒロミヤカザル（京都府）

自分の「心臓」よりも誰かの「足音」。強く自分を「生か」すものがあることは、喜びであり哀しみでもある。

美しい訛りで
夜を見渡せば
色づいていく
おかえりの声
まちりこ（埼玉県）

聴覚と視覚がまざりあうくるめきのなかで、「おかえりの声」が胸に満ちてゆきます。

いるのいないの？
そう聞かれたら
そうっと上を向く
桜咲（千葉県）

八木重吉の「瞳」という詩「うつむいてみたら／うへのはうで 瞳がひらいてぬれてゐるやうなきがした」とどこか響き合っているように思えました。超越的なものを感知しようとする心の動きが伝わってきます。

死ぬ前の蛇は無限のかたちして

細村 星一郎（東京都）

蛇は「無限のかたち」になれるのか、命が失われようとする刹那、有限な肉体が∞のかたちとなって魂を無限へと導くのかと感じ入りました。

夏の日プールの後に見た夢は

歴史の教科書12ページ分

まちりこ（埼玉県）

プールの後の歴史の授業中にうとうとしてしまったのでしょうか。「12ページ分」は結構な量です。短い居眠りの間にどれほどの時を越えたのか。現実の時間と全く違う時間が内側で流れることの面白さ。

腕時計になる。

夜の空を飛ぶ。

翠（東京都）

「腕時計にな」って「夜の空を飛ぶ」という発想が新鮮です。誰かの腕に巻かれるのではなく、自分の意志で飛ぶ。間の一行の空白に、飛ぶ前に息を整えエネルギーを溜めているような気配が感じられます。きっとどんな時計の針も刻んだことのない時を刻むに違いない。

あの人が投げた茶碗を取りに行く

まちりこ（埼玉県）

おそらくこの「茶碗」は割れてはいない。そこに惹かれました。日常はやり直しをくり返しながらかつてゆく。

誰もいない時間が恋しくて

自分のために家出する

冷蔵庫に夕食を入れて

茶和鈴（東京都）

次の日の朝食前にはもう戻るつもり、いえ、ほんの数時間の「家出」なのでしょう。心置きなく「誰もいない時間」を過ごすためには事前の準備がいる。誰かとともに生活することの煩わしさとかけがえのなさ。

愛用のポストが忽然と姿を消した

実は

最初からなかったのかもしれない

風船（東京都）

「最初からなかった」としたら、出したはずの手紙はどこへ行ったのだろう。「姿を消した」ポストともに自分自身の存在が揺らいでくる。もしかしたら手紙が届いた世界と届かなかった世界、ふたつの世界があるのかもしれない。

きみの耳元で

泳ぐピアス、

からずっと、聞こえていた

砂時計の落ちる音

藤ほたる（神奈川県）

「泳ぐピアス」をつけた寄る辺ない「きみの耳元」。大切な時間がさらさらと過ぎてゆく音が聞こえてきても、その音を止めることはできない。

悪い子は眠れ眠れ

その舌に

ガムシロップを

たらしめてやるぞ

翠（東京都）

子守唄は“よいこだ、ねんねしな”、それが「悪い子」。魔女のセリフのよう。でも「ガムシロップ」は果たして罰なのだろうか？むしろ甘い夢を見ることができそうな。二重のねじれを面白く感じました。